平成 30 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同研究班」 研究報告書

平成 31 年 4 月 25 日現在

<table>
<tr><td>研究課題名</td><td colspan="4">近現代の中央ユーラシアに関する共同研究</td></tr>
<tr><td rowspan="3">担当者</td><td colspan="2">氏名</td><td colspan="2">所属機関・職</td></tr>
<tr><td>1</td><td>宇山智彦</td><td colspan="2">スラブ・ユーラシア研究センター・教授</td></tr>
<tr><td>2</td><td>長縄宣博</td><td colspan="2">スラブ・ユーラシア研究センター・教授</td></tr>
<tr><td rowspan="4">班員</td><td colspan="2">氏名</td><td>所属機関・職</td><td>専門とする研究分野</td></tr>
<tr><td colspan="2">吉村貴之</td><td>早稲田大学・研究員</td><td>アルメニア近現代史</td></tr>
<tr><td colspan="4">研究テーマ</td></tr>
<tr><td colspan="4">ソヴィエト・アルメニアと在外同胞との関係</td></tr>
</table>

研究成果の概要

本研究班では、ロシア帝政期から現代政治までを幅広く視野に収める研究を行っているが、2018 年度は特に、多くの研究者と協力して、中央ユーラシア研究のスタンダードとなる本を出版するという面で成果を挙げた。宇山は編著書『現代中央アジア：政治・経済・社会』を日本評論社から刊行し、また宇山と長縄の両者が『中央ユーラシア史研究入門』（山川出版社）に執筆した。2019 年 2 月 7 日には、これまで日本の中央ユーラシア研究を牽引してきた小松久男先生の東京外国語大学における最終講義に担当者二名と班員が出席し、そこに集まった多くの中央ユーラシア近現代史・現代政治の専門家たちと、来年度以降の共同研究班の運用も含め、共同研究の可能性について協議した。その成果は、次年度にも現れるはずである。

班員は吉村氏一名であったが、担当者二名がカバーしきれないソ連期コーカサス、とくにアルメニアについて精力的に資料収集と成果報告を行った。資料調査としては、2018 年 8 月 15、16 日にモスクワのロシア国立歴史図書館で、ソ連邦末期のソヴィエト・アルメニアに関する研究書を収集し、8 月 17～23 日にエレヴァンのアルメニア共和国国民図書館で、1990 年代のアルメニア共和国の定期刊行物のうち在外同胞の活動に関する記事を収集した。さらには、コミタス記念館・研究所でアルメニア近代音楽の創始者コミタスに関する資料を収集した際に、その直弟子であるミフラン・トゥマジャンに関する資料を発見した。

この調査を踏まえて、2018 年 11 月に昨年政変のあったアルメニア現代政治について、日本国際政治学会で報告し、2019 年 2 月には、本センターで「コミタスの肖像：「アルメニア近代音楽の創設者」の社会的受容」と題した発表を行った。発表では、コミタスの社会的評価の背景として、晩年のアルメニア教会との決裂で世俗的芸術家というイメージが付いたこと、第一次大戦中にオスマン帝国で起こったアルメニア人虐殺に巻き込まれたのをきっかけに精神のバランスを崩し、虐殺の

研究成果の概要（続き）

犠牲者の象徴となったこと、さらにはソヴィエト・アルメニアでコミタス民謡全集を編纂する際に、西側で活動したコミタスの直弟子トゥマジャンを呼び寄せたことで、その出版活動の権威付けが行われたことを指摘した。研究会では、他の諸民族のケースも念頭に置きながら多くの質問・意見が出され、近代の民族文化形成における音楽の役割や、ソ連体制下での民族アイデンティティのあり方について認識を深めることができた。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書　等）※謝辞の有無について明記願います。

宇山智彦、樋渡雅人編『現代中央アジア：政治・経済・社会』日本評論社、2018 年、301 頁。（宇山執筆章：「現代政治史：歴史的背景・ソ連の遺産と独立国家建設」3-29 頁）（謝辞無）

Уяма Томохико. Политическая стратегия Алаш-Орды во время гражданской войны: сравнение с национально-культурной автономией тюрко-татар // Личность, общество и власть в истории России: сборник научных статей. Новосибирск: Изд-во СО РАН, 2018. С. 260–271.（謝辞無）

宇山智彦「中央アジアと中国の関係の現実的な理解のために」『東亜』2018 年 12 月号、30–38 頁。（謝辞無）

宇山智彦「中央アジア：カザフ草原とトルキスタン」小松久男、荒川正晴、岡洋樹編『中央ユーラシア研究入門』山川出版社、2018 年、229-251 頁。（謝辞無）

長縄宣博「ヴォルガ・ウラル地方」小松久男、荒川正晴、岡洋樹編『中央ユーラシア研究入門』山川出版社、2018 年、221-229 頁。（謝辞無）

Norihiro Naganawa, “Designs for *Dâr al-Islâm*: Religious Freedom and the Emergence of a Muslim Public Sphere, 1905-1916,” in Randall A. Poole and Paul W. Werth, eds., *Religious Freedom in Modern Russia* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2018), 160-181.（謝辞無）

長縄宣博「「ロシア・ムスリム」の出現」小松久男編『1905 年：革命のうねりと連帯の夢（歴史の転換点 10）』山川出版社、2019 年、92-145 頁。（謝辞無）

吉村貴之「現代アルメニア系在外同胞と本国政治」日本国際政治学会 2018 年度研究大会（2018 年 11 月 3 日、大宮ソニックホール）（口頭発表のため、文書による謝辞なし。）

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。